様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０４１４

研究課題名（和文）２０世紀初頭の中国における知の形成とナショナリズムー周作人と民俗学

研究課題名（英文）Chinese Nationalism in the early twentieth century; Zhou Zuoren and folklore

研究代表者
子安　加余子（Koyasu, Kayoko）

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：１０３７７４６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、西洋近代の学問方法を受容することによって、中国の民俗のあり方を究明しようとした中国知識人・周作人の学問的営為を分析対象とした。西洋近代の学問に通じ、かつ知日家だった周作人が創出した中国民俗学を検討することは、ひいては、西洋・日本・中国における近代学問の伝播のあり方や系譜を明らかにすることを可能にした。具体的には、周作人の民俗学研究の源泉に関する検討（A. ラング、フレイザー、柳田国男、柳宗悦）を通じて、20世紀初頭の中国における知の形成を、ナショナリズムとの関係から考察し、一定の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：In this research, we analyzed academic acts of Chinese intellectual Zhou Zuoren who tried to investigate Chinese folklore by accepting Western modern academic methods. We investigated the Chinese folklore studies by Zhou Zuoren who was familiar with the Western modern academic and familiar with Japanese culture, and finally clarified the way and the genealogy of modern academic dissemination in the West, Japan and China. Specifically, through discussions on the source of Zhou Zuoren's folklore studies (A. Lang, Frazer, Yanagita Kunio, Yanagi Muneyoshi), we considered the formation of knowledge in China early in the 20th century from the relationship with nationalism.

研究分野：中国文学

キーワード：中国民俗学　周作人　フレイザー　柳田国男　郷土研究　江馬修　柳宗悦　日本民藝運動

１．研究開始当初の背景

(1)　ポスト国民国家の文化研究へと時代が進むにつれて、対象との関係性が先鋭に問われる民俗学に注目することは、西洋文明の受容過程を近代中国に即して検討することを意味する。この分野の諸研究はすでに数多く、人種や進化の概念がいかに伝播されたかという点が解明されてきた。本研究もこうした動向を受けており、さらにはアジアが近代以降いかに認識されたかという視点を含み持つものである。

(2)中国民俗学研究に関しては、1980 年代以降から関連する基礎資料の出版が相次ぎ、およそ一世紀にわたる中国民俗学活動の全容を解明するための準備が為されてきた。同時に、申請者も含む思想史的アプローチを試みた研究成果も現れている。すでに基礎研究の段階から次なる段階が求められている中、本研究はその要請に応えるものと位置づけられる。

２．研究の目的

本研究は、西洋の近代的学問方法を受容することによって、中国の民俗のあり方を究明しようとした近代中国を代表する知識人の一人、**周作人（1885-1967）**の学問的営為を分析対象とし、その意義や問題点を明らかにしようとするものである。

(1)近代中国きっての知日家と名高い周作人が創出した中国民俗学には、folklore（英）、Volkskunde（独）、柳田民俗学（日）の影が色濃いことから、周作人が受容した中国民俗学の分析によって、西洋・日本・中国における近代学問の伝播のあり方や系譜を明らかにする。

(2)周作人の民俗学研究というケーススタディを通じて、20 世紀初頭の中国における知の形成とナショナリズムの関係に、ポスト国民国家における文化研究という新たな視点から切り込むことを目的とする。

３．研究の方法

(1)文学研究

中国近現代文学研究においては近年、非文字テクスト（映画、演劇等）に関する研究が盛んだが、一方で、紙媒体による文字テクストを資料とする研究の重要性が再確認されている（『中国 21』43「特集 中国近現代文学研究」2015.8）。本研究でも同じく、テクスト分析を主体とする文学研究の手法を採用する。「民俗」を語るのは誰か、という問いに誠実であろうとした周作人は、いわゆる人類学的フィールドワークを経験せず、文化的他者を語る（テクスト化する）場合、避けがたい政治性（排除の論理）に自覚的だった点を重視する為である。

(2)個別テーマごとに資料の体系的・集中的精査収集および精読・考察を通じて、中国民俗学史の全容解明に貢献する。その為に、日本民俗学関連の研究所（成城大学民俗学研究所ほか）で資料調査を行う。また申請者が作成中である、「周作人、民俗学関連書購読年表」を完成させる。

４．研究成果

(1)一年目

周作人が西洋の学術思想全般を広く摂取したのは、日本留学期（1906-1911）に遡る。特にイギリスを中心とするヨーロッパで 19 世紀末に盛んになった人類学へ傾倒することで、民族、宗教、風俗、性学への理解を深めており、中でも J.G. フレイザーへの評価が高い。そこで、一年目においては周作人の民俗学形成に大きく関与した、H. エリス、フロイト、A. ラング、フレイザー等を相互に関連付ける作業の一環として、フレイザーとの関係性を明らかにし、周作人の民俗学形成の思想的源泉（西洋）を整理した。その結果、中国民俗学創出との関係を探る為の準備作業を一応終えたことになる。

具体的には、周作人はフレイザーの代表的著作(『金枝篇』、『サイキスタスク』等)を受容して、「野蛮人」に対する理解を得ることによって、そこで得た知見を応用して国民性批判に積極的に取り組むこととなる（1920 年年代)。その一方で周作人は、原始宗教が生成される根源ともいえる死者に対する恐怖や、タブーといったものへ共感を寄せながら、中国の死後の世界観（「鬼」）を語り始めるようになる。その語り方や手法がフレイザーのそれと実に酷似している点から、中国人の「真心」（周作人はそれを「鬼」に代表されると考えた）を知る術として、フレイザーの研究手法と文章スタイルが応用されていたことが明らかとなった。フレイザーのスタイルが踏襲されたということは、民俗学に対する知的暴力の介在に慎重であったことと不可分であり、つまりは西洋近代の価値観を受容するも、相対化することで、自国の民俗に対する視座を獲得していたという周作人の民俗学に対する重要な姿勢が確認された。

(2)二年目

周作人と日本民俗学の関係に焦点を絞り研究を進めた。具体的には、周作人が注目した、ないしは受容しつつも拒絶する部分を持ち合わせていた、柳田国男民俗学および、彼の強い影響下にあった江馬修・三枝子夫妻の活動に関して調査検討することで、柳田国男の郷土研究から、『ひだびと』（戦時下にもかかわらず、およそ 10 年もの長きにわたり継続された飛騨地方の民俗誌、柳田ら中央から高い評価を得た）の受容のあり方を検討した。

その結果、『ひだびと』は飛騨高山という一地方（柳田のいう郷土）が舞台であった点で、柳田の郷土研究を実証的に行う場として

機能する側面があったことが明らかになった。主宰者の江間夫妻が、直接間接に柳田の強い影響下にあったこともそれを後押しした。そうした『ひだびと』に、日本の民俗を好んだ周作人もまた一方ならぬ好意を寄せた。周作人が柳田民俗学の郷土研究に対して、反発する部分を持ちながらも評価していた理由でもある。『ひだびと』は戦局の悪化に伴い停刊を余儀なくされるが、ちょうどその頃、周作人と柳田国男が直接会見する可能性があった(1943 年)点も看過できない史的事実として指摘した。

日本研究屋をたたむと公言して占領下北京に「残留」した周作人だが、日本民俗学とは例外的に向き合い続けた。そうした思考法は様々な評価をされてきたが、『ひだびと』に集った柳田民俗学門下の活動との接点から、全体主義体制が確立するのを目の当たりにしながら、それへの「抵抗」という顕在的行為は示さずとも、より深い意識の中でそれに一体化しない工夫が、周作人の民俗学研究の中に見出すことが可能ではないかという結論に達することとなった。

(3)三年目

最終年度は、一年目（周作人と人類学周辺：フレイザー）、二年目（周作人と日本民俗学：柳田国男「郷土研究」と江馬修『ひだびと』）の研究成果を踏まえ、周作人と日本民俗学との重要な関連性を捕捉する為、周作人と柳宗悦（日本民藝運動）に関して集中的な検討を行った。

柳宗悦(1889-1961)とは、周作人が柳田国男と並び称する形で自身の民俗学形成に際して敬意を以て接したという記述を残す人物である。柳宗悦は、『白樺』同人であり宗教哲学者にして日本民藝運動の創始者だったことはよく知られる。朝鮮の民藝美に強く魅せられた柳宗悦の、朝鮮人に対する日本の軍国主義に抗議した姿勢は、日本の人情美に魅せられ、日本文化に並々ならぬ関心を寄せた周作人にとって、相応の意味を有したと推測される。とりわけ、柳宗悦の日本民藝運動が周作人の民俗学形成に与えた意味は大きく、その歴史的、思想的意味を考察することは、ひいては日本占領下で日本と決別しながらも、例外的に日本の民俗だけは語り得たことの意義を探ることを可能にする。

以上の問題関心に基づき、必要な基礎資料の収集購入（雑誌『民藝』ほか）を完了し、テクストの集中的精読を経て、考察した。その成果は、中国文芸研究会の学会誌『野草』に投稿し、査読を経て掲載の運びとなった。その後、同学会の書評の会で取り上げられ、論文評を得ることにより、研究の客観的評価を得、同時に今後取り組むべき方向性や課題が明確になった。書評の会でも指摘された点だが、従来、周作人と日本民俗学の関係という点では、柳田国男が大きくクローズアップされてきた。このたび、柳宗悦との関係性を掘り下げた論考は、申請者による研究論文が初の成果であり、周作人研究史においてもその意義は大きい点が確認された。

(4)個別の研究テーマでの仕事と並行して、申請者が作成中だった、「周作人・民俗学関連書購読年表 1912-1934（未定稿）」が一応の完成をみた。周作人資料に関しては、彼の日記に代表される個人的情報に関わる資料はすべてが刊行されない事情があるが、今後も可能な限り資料調査を継続することで、本年表を完成稿に近づける努力を続ける予定でいる。

(5)(1)～(4)の研究段階（西洋・日本の近代的学問の受容過程の考察）を経て、周作人が西洋・日本の近代的学問手法を糧に中国国内で創出した「民俗学」とは一体何だったかを考察した。

一つは、周作人は中国民俗学の準備期・創生期・成熟期いずれの時期においても、他の民俗学者の精神的支柱であったことから、彼の仕事の国内における思想史的位置づけが不可欠であることが明白になった。この点は先行研究にやや欠如していたアプローチの視点であり、その重要性を再確認した。

一つは、20 世紀初頭という、民俗学・民族学・文化人類学などの学問領域がなお未分化だった当時の中国において、それらを包括していたとも言える「民俗学」を周作人が発見、創出したこと、それが中国学術界でいかなる意味を持ち得たか、言い換えれば、近代とナショナリズムの問題を背景に、日本経由の西洋近代学問の中国における知の形成のあり方と、それが孕む問題点（「西洋対アジア」、「文明対野蛮」といった近代の本質的構造を問い直すことや、西洋・日本・中国の学術交流のあり方、また周作人の「対日協力」による歴史的評価の問題等）が、周作人の民俗学研究を通じて明らかになった。今後さらに総括して、国際的視点による学際的研究へと発展させていく予定である。また、本研究テーマは一冊の書にたえうる大きさを有しており、ゆくゆくは一冊の書として研究成果を世に著し、学術的、社会的貢献を果たしたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 子安加余子、「周作人と柳宗悦の民藝運動（周作人特集）」、『野草』、査読有、98 号、2016.10、42-63

② 子安加余子、「周作人の人類学受容をめぐる考察――フレイザーの受容から『鬼』の言説の創出へ」、『中央大学論集』、査読無、36 号、2015.2、23-36

〔学会発表〕（計１件）

① 子安加余子「周作人の人類学受容をめぐる一考察」、中央大学人文科学研究所「中国文化の伝統と近代」第１回研究会、中央大学多摩キャンパス、2014.6.28

〔図書〕（計１件）

① 子安加余子 他、中央大学出版部、『近現代東アジアの文化と政治』（土田哲夫編著）「第５章　周作人の郷土をめぐる葛藤――柳田国男「郷土研究」と江馬修『ひだびと』」、2015、131-158

６．研究組織

(1)研究代表者

子安加余子（KOYASU, Kayoko）
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：１０３７７４６８